

日本の海岸線の長さ

ローレル・テイラー

ある寒い春の日に ・錆びつつのバス停から砂浜まで歩き
あそこで海の膨らみを見守る 夏になるとこの北国なのに
ここなら海を泳げる ・

・拍子木がちょんちょん叩きなり 幕は開く
うちの学生の叫び声と両親の注意と足指の ・間の砂の粒の妙な感触
その時

ワンピースの裾をあげ私と炎の女は二人で瀬を ・歩き 海星と子ガニ
の動きを

覗き このような寒い国の海がこんなに暖かくなることに驚き話す
そのワンピースは袖がないし日本の文化に認識しすぎている私はこの
裸の肩を自分の学生に ・見られることは悪いかもと悩みながら
今まで草原ばかりに ・囲まれている思い出に対するこの
理解もできないほど広い水の面にあつとする 砂浜の端

からたこ焼きとレモネードとテキ屋さんの招き声が
混ぜ合い ・あんまり賑やかな空気に圧倒されそうなのに
瀬から上がりがたい 腿まで暖かく優しく

恋人の ・ようにそつと触れあう水が
ワンピースの裾と遊びながらテキ屋さんを

反響し招く ・人間はもともと海からのもので
海に帰ったら 上に鷗と太陽が互いに

この人の群れを目指す ・鷗はポテトを盗み
太陽は肌をやき その間に空は明るく青く輝く

・拍子木がちょんちょん叩きなり 幕が閉まる

四月といっても

•この寒い国に雪がまだ

溶けていない 海から鋭い風が強く吹いてき

ほっぺが日焼けでもされたように •燃える

平日と寒さのせいで私はこの砂の上に一人

子供は学校にいるし •両親は職場で働いている

足元に海が入り出入り出 その定期的な動きが私の心を奪う

水に入っていないなくても水から上がりがたい ここに この塩

の香りに包まれながらずっといたい •水と砂が合う線の美しさを

暗記したい 記録したい

•芝居ではなく具体的な何かで

この小さな街でも工具店はある

•はずなのでスマホで

調べそこへ歩く あんまり小さい店でもとりあえず金槌

と釘は絶対にある •店員さん いや店長のおじいさんが私

の焼かれたほっぺと金の髪にあやしい目を向きながら

ビニール袋を渡してくれる •私はこれからどんな修理を

するかおそらく想像もつかない 砂浜に戻り遠くの水平線の

漁船を伺う 何隻かが昼寝でもしている鴉のように •荒い波に

ひょいと浮かんでいる

•拍子木がちょんちょん叩きなり 舞台を

あらためてよみがえらすけど その時に漁船があったかどうかは不明

昔教えた子供たちの多くが漁業に関わったに違いない

イカやホタテやサケが •とれるこの町には

子供の明日が限られている 私の元生徒がもしかして今

そのうたた寝の船にいるかもしれない 海に帰っている •かも

しれない その大人になった子を羨ましく思いながら

修理を始める 砂が乾いていると乾いていない

線を測定しあそこに十五センチほど •ある釘

を打ち始める 砂は腿のようにへこみ

釘は優しく涼しく沈むきらりとする金属が

太陽の下に海の記録になる 打った途端海が反対し

・前の線

より浜を上る 頭の中の芝居と今の懐かしむ頭脳が

混ぜ合っても私は砂と水の裏切りを憎むことはできない

・

海が変わらないものになったら海ではなくなるからだ

次の釘を打ちその線の打ち消しを待つ 上げ瀬に

・がっ

かりされないまま撃ち続ける 釘がなくなったら今まで

の足跡を振り返る 鷗の鳴き声が釘ほど鋭く拍子木

ほど大きく響く 炎の夏と今の灰の春が

・

重なり私が歩いた線を目測してみる

約二十メートルに約十年の春に

・

約一億粒の砂に

約五十本

の釘

に

・

海の

唸り声

に

・

・